消化器領域に転移をきたした悪性黒色腫の一症例

◎上西 菜月[1)]、野﨑 加代子[1)]、城戸 隆宏[1)]、宮下 恵美[1)]、岡村 優樹[1)]、日野出 勇次[1)]、渡辺 秀明[1)]、西方 菜穂子[1)]
国立病院機構 鹿児島医療センター[1)]

【はじめに】悪性黒色腫はメラニン色素を作るメラノサイトが悪性化して発生し、早期に転移をきたす悪性度の高い腫瘍である。転移先はリンパ節、脳、肺、肝臓の順に多く、腹部超音波検査(AUS)にて肝臓以外の消化器領域に転移を指摘されることは稀である。今回、悪性黒色腫の胆嚢、膵臓、他、多発転移を認めた症例を経験したので報告する。

【症例】40 代、男性、身長 165cm、体重 54kg

【既往歴】小児喘息、クローン病

【現病歴】左頸部リンパ節腫大疑いで当院紹介となった。血液検査で肝胆道系酵素の上昇あり、精査目的で AUS が施行された。

【腹部超音波検査所見】胆嚢内腔に等～低輝度の不均一な充実性エコーが充満しており、内部に一部低輝度結節を認めた。膵臓全体にも同様の低輝度結節を認めた。充実性エコー内に明らかな血流シグナルは認めず、悪性リンパ腫もしくは転移性腫瘍を疑った。充実性エコーと胆嚢壁の境界は比較的明瞭で、肝臓への直接浸潤は認めなかった。左肝管拡張(14mm)、内部に均一な充実性エコーを認めた。末梢胆管の拡張は認めなかったが、充実性エコーによる高度狭窄が疑われた。肝右葉に 12mm 大の低輝度結節を認めた。腹腔内に多数低輝度で縦横比の高いリンパ節を認めた。

【経過】心臓超音波検査で心外膜・心筋層・心内膜に多数腫瘍を認めた。CT でも全身に多数腫大リンパ節、皮下結節、胆嚢壁肥厚、膵腫大、頭蓋内の病変等を認め、皮下結節の生検にて悪性黒色腫と診断された。

【考察】皮膚癌の代表的なものとして基底細胞癌、有棘細胞癌、悪性黒色腫があり、いずれの癌でも他臓器へ転移をきたす。悪性黒色腫は皮膚癌の中で最も悪性度が高く、早期に他臓器へ転移をきたすが、臨床経過中に消化器領域へ転移を指摘されることは 2~4%と報告されており、稀である。消化器領域の中では小腸、大腸、胃の順に転移が多く、胆嚢、膵臓への転移は極めて稀である。原発巣は分かりにくいが、転移性腫瘍を疑った場合は患者の既往歴を確認し、皮膚癌からの転移の可能性も鑑別にいれる必要があると考える。

連絡先：099-223-1151(内線 7514)